

【高松法務局長賞】

ファーストペンギン

高松市立古高松中学校 三年 横田結香

私は小学校高学年のころ、いじめを見たが、何もせず、黙って見ていただけだった。標的は勉強と運動がともに得意ではない男の子で、誰かと話すのも苦手そうだった。いじているのは、「スクールカースト」上位の発言力のある七人ほどだった。私はそれを見るのがとても辛かった。でも、みんなは何も言わなかったし、私も何も言えなかった。ある日の掃除の時間に、数人の男の子が標的の男の子に、「バカ」「汚い」などと言いだした。その子は嫌がってその子たちから逃げようとしているのに、追いかけて悪口を言い続けていた。すると友人が小声で「何が楽しいんだろう。」と言った。私は、自分と同じように思っている子がいる事に驚いた。みんないじめを見て見ぬふりをして、何も言わなかったからだ。

その日家に帰った私は、友人のようにいじめを良く思わない子はいるのに、なくならない理由は一体何なのかを考えた。いじめをする子たちの気が強くて、とても逆らえない相手だからだろうか。相手が大勢だからだろうか。何より私は、みんながいじめを黙って見ている状況こそが理由ではないかと思った。「誰も声をあげない。自分だけが注意したら、次は自分が標的になるかもしれない。」そのときのクラスメート達はきっと、そう思っていたのだろう。そして加害者は、周りは何も言ってこないのですさらに勢い付いていく。

そんなとき私が思い出したのは、数年前の担任の先生が教えてくださった「ファーストペンギン」の話だ。ペンギンの群れは、えさをとるために海に入らなくてはならないとき、最初はこの個体も海中に天敵がいなかった、安全であるかを気にして尻込みするのだ。だが、勇気

を振りしぼって一羽が飛び込めば、どっと後に続く。その初めの一羽に敬意をこめて、「ファーストペンギン」と呼ぶのだそうだ。先生は、私たちに「ファーストペンギンであってほしい」とおっしゃっていた。私は、今こそ「ファーストペンギン」になろう、と決心した。クラスで起こっている問題に対して、少しでもできる事はないか考え、そして連絡帳にその日何があってどう感じたかを書き、先生に相談した。その結果、昼休み中に先生が教室を見回り、現場を見た際に注意することになった。その後、露骨な嫌がらせや悪口は少し減ったように感じた。私は安心する反面、後悔もしていた。もっと早く行動しておけばよかった。怖がらずに声をあげればあの子を少しでも早く安心させることができていたかもしれないのに。と、今でも思っている。

私には人の目を気にしたり、緊張して、思った事をそのまま正直に発言できなかったり、気おくれして正しいと思う行動をとれなかったりするところがある。この経験は、そんな私の短所と向きあうきっかけとなった。いじめがいけない事だと分かっているが、最初の一人になるのが怖くて行動できない自分を情けなく思うと同時に、集団で生活する上で、誰かが言わなくてはならない、しなくてはならない場面で、勇気を出して自ら行動する事がどれほど重要であるかを身をもって学んだ。また、自分のまわりで起こる問題を黙認すると、事態をさらに悪化させてしまうのだと深く理解した。

私はこの経験をしてから、「何事も、勇気を出して」という言葉を心に留めている。例えば学校でのグループワークで誰も発言せず、課題がなかなか進まないときや、忙しそうな家族や友人が手伝いを必要としているときなどの身近な場面でも、「私がやります」と口に出すのはやはり緊張する。きつと、私以外にもそんな人たちは沢山いるだろう。だが、あと少しの勇気を出して、そんな緊張した自分を乗り越え、自分から声をあげて行動する「ファーストペンギン」になる事の積み重

ねが、誰かが理不尽に傷つけられることのない、助け合いながら安心して暮らしていける社会を実現させる一歩となるはずだ。まだまだ怖くて、積極的な行動をためらってしまうときもあるけれど、誰もが安全にすごすために、私は、どんなときも周りの人を思いやって行動する人であるようにこれからも努めていきたいと、強く思っている。